

コラム

人工知能（A I）に子育ては可能！？

最近、人工知能（A I）という言葉をよく聞くようになりました。実際に、街中で接客ロボットを見ることもありますし、介護ロボットや自動運転車など実用化に向けて開発が進んでいます。

株式会社野村総研が平成 25 年 12 月に発表したレポートによれば、10～20 年後には、日本の労働人口の 49%が人工知能やロボット等で代替可能になると試算されています*。

(*)平成 27 年 12 月 2 日付プレスリリース「日本の労働人口の 49%が人工知能やロボット等で代替可能に」

しかし、すべての仕事が人工知能などに取って代わられるというわけではなく、人工知能が苦手な分野もあります。例えば、まったく新しいものを生み出す想像力や人と人との信頼関係をつくるコミュニケーション能力を使用する仕事などがそれに当たると言われています。

子育てにおいても、人工知能では代えられない仕事をこなす能力を身に付けられるよう子どもを育てることが重要になってくるかもしれません。

何より、日々変化をし、一人ひとりがまったく違う個性を持つ子どもに対して、愛情を持って向き合っていくという行為そのものも、機械にとって変えることのできないかけがえのない行為だと言えるのではないのでしょうか。



むごい教育

「むごい教育」と聞くと、どんな教育を思い浮かべるでしょうか。戦国時代、徳川家康がまだ幼くて、竹千代と名乗っていた頃の話です。

大名である今川義元は、竹千代を人質としてとりました。

そして、義元は、教育担当の家来に対し、こう指示しました。

「竹千代には、むごい教育をせよ」

これを聞いた家来は、竹千代に粗末な食事を与え、ほとんど休みなしで武術や学問を教え込む生活をさせました。

しばらくして、これを聞いた義元は大変怒り、このように言ったのです。

「ばかもの！それはむごい教育とは言わん！朝は好きなだけ寝させて、ぜいたくな食事を与え、武術や学問を無理にさせず、本人の望む通りに、何でも与えてやればよい。そうすれば、たいていの人間は駄目になるから。」

つまり、義元は、甘やかして、わがままな生活をさせることを

「むごい教育」だと呼んでいたのです。

結果的に、徳川家康は「むごい教育」を受けることなく、大成して徳川幕府の基礎をつくりました。

皆さんの子育て、「むごい教育」になっていませんか。



コラム

子育て四訓

「子育て四訓」をご存じですか？

これは、山口県の中学校で校長などをされていた方が長年の教育経験をもとにまとめたものだそうです。

『子育て四訓』

- 1 乳児はしっかり 肌を離すな
- 2 幼児は肌を離せ 手を離すな
- 3 少年は手を離せ 目を離すな
- 4 青年は目を離せ 心を離すな

「やまぐち子育て四訓の会」

子どもの成長過程のそれぞれの時期にあわせた親の心得とも言えるものですが、「手放すこと」と「愛情を持ち続けること」の両方の大切さを表している言葉ではないでしょうか。



コラム

福沢諭吉の「習慣のすすめ」

「学問のすすめ」で有名な福沢諭吉は、その著作の中で、家庭での習慣づくりの大切さについても述べています。

教うるより習いという^{ことわざ}諺あり。けだし習慣の力は教授の力よりも強大なるものなりとの趣意ならん。(中略)一家は習慣の学校なり。父母は習慣の教師なり。而^{しこ}してこの習慣の学校は、教授の学校よりも更に有力にして、実効を奏すること極めて切実なるものなり。

ここでは、子どもたちが生活習慣を身に付けるのは家庭であって、父親や母親がその先生になりますよとした上で、この家庭で生活習慣を身に付けることが、学校で勉強を教わることよりも大事ですよと伝えています。

学問を身に付けることの重要性を説いたのが「学問のすすめ」ですが、それに増して、家庭での習慣づくりの大切さを140年ほど前に福沢諭吉は訴えかけていたのです。

今の時代においても、この教えを大事にしたいですね。



ことわざは家庭教育のヒント集

古くから伝えられてきたことわざには、先人たちの知恵や教訓が詰まっています。現代の子育てにも通じることわざもたくさんありますので、いくつか紹介します。

寝る子は育つ

→よく眠る子どもは、健康ですくすく成長するということ。

早起きは三文の得

→早起きをすると良いことがあるということ。

這えば立て立てば歩めの親心

→幼児の成長を待ちに待つ親心のこと。

三つ子の魂百までも（雀百まで踊り忘れず）

→幼い時の習慣は年老いても変わらないということ。

門前の小僧習わぬ経を読む

→普段見聞きして慣れていれば、知らず知らずのうちにそれを学び知るようになるということ。

習うより慣れろ

→物事は、人に教わるよりも自分で直接体験する方が身につくということ。

コラム

ルーティーンと習慣づくり

ルーティーンとは、決められた一連の動作や動きのことです。スポーツ選手の中には、このルーティーンを取り入れている選手も数多くいます。

イチロー選手は、球場に入る足の動きから打席に入る時の動作まで細かいルーティーンを守っているそうです。また、ラグビーのキッカー五郎丸選手も、キックをする際のポーズがルーティーンとして話題になりました。

このルーティーンは、単なるゲン担ぎというだけでなく、物事に集中できるという効果もあるようです。しかし、毎日・毎回同じ動作をするということは、意外に大変なことで、徹底した自己管理能力がないとなかなかできないことです。

ルーティーンは、スポーツ選手に限ってのものではなく、私たちの日々の習慣にも通じるところがあります。

イチロー選手の打席での動きを引き合いに、毎日の生活習慣の大切さを子どもにも伝えてみてはいかがでしょうか。



家庭読書に関するQ & A

Q 字が読めるようになっても本を読んでもらいたがりますが、いつまで読んであげるのが良いのでしょうか。

A 子どもが読んでもらいたがるときは、その本自体をお気に入りなのに加えて、一緒に世界を楽しみたいという思いもあります。このような触れ合いが心に残り、文字が読めることよりももっと大切な、豊かな心が育まれていきます。

Q 文字が少ない本ばかりを読みたがります。(活字を読まずにマンガばかり見えています。) もっと活字の多い本を読ませたいのですが、どうしたらいいでしょう。

A 本を読むことが楽しいということが大切です。文字は少なくとも内容が自分の興味とぴったりと合っていたり、ストーリーの展開に引かれたり、言葉やそのリズムが面白かったり、絵が魅力的であったりと、自分なりにその本の良さを見つけているのでしょう。本が好きになっていくことから、文字への興味がふくらんでくることと思います。

Q どんな本を子どもに薦めればいいのかわかりません。

A お近くの公立図書館の司書さんに気軽に相談してみましよう。図書館では児童書も貸し出していますし、お子さんの年齢や興味に応じた本が紹介してもらえらると思いますよ。



コラム

山本五十六の名言

戦前の軍人であり、太平洋戦争に最後まで反対したと言われる山本五十六は、数々の名言を残していることでも有名です。その中で、子育てにも通じる言葉を紹介します。

やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、
ほめてやらねば、人は動かじ。

「やってみせる」「言って聞かせる」「させてみる」そして「ほめる」。この4つができて、はじめて人は動くのだという意味です。

この4つは、それぞれとても大切なことです。子どものしつけなどは、うまくいかないこと、壁にぶつかることもあります。そんなとき、この言葉を思い浮かべて実践してみてはいかがでしょうか。

ちなみに、この言葉には、次のような続きがあります。子育てだけでなく、職場での人材育成など「人づくり」全般に通じる言葉として、多くの人に受け継がれています。

話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。
やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。

コラム

五輪選手の育て方

オリンピックに出場するようなトップレベルの選手は、家庭ではどんな教育を受けてきたのでしょうか？

新聞社が平成 27 年のリオデジャネイロ五輪への出場選手の親 106 人を対象に子育て意識調査を行った結果があります。

この結果によると、家庭教育で心がけたことについての問いに対しては、「やりたいことをやらせる」「嫌々させず、自主性に任せる」などの意見が 36 人で最も多かったそうです。逆に、家庭教育であえてしなかったことは何かとの問いには、「強制しない」「親の考えを押しつけない」などの意見が 36 人と最多で、次に「重圧を与えない」「競技の話を家庭でしない」などの意見が 10 人と続いています。

家庭教育で「心がけたこと」と「あえてしなかったこと」のいずれも、子どものことを気遣いながらも、気持ちを尊重する親の思いが窺えます。

トップアスリートだけでなく、どんな分野においても子どもの上達の秘訣は、「子どものやりたいという自主性を尊重しながら夢を後押しする」、そんな親の姿勢なのではないでしょうか。

出典：平成 27 年 8 月 18 日付読売新聞「五輪選手の育て方」



コラム

やりたい気持ちに応える

テレビなどで活躍中の魚博士のさかなクン。小さい頃から魚の絵ばかり描いて、学校の勉強には身が入らなかったそうです。

しかし、さかなクンのお母さんは、勉強を強制せずに、さかなクンがタコの絵を描きたいと言えば、1か月間味付けを変えながらタコ料理を作ってくれました。

また、家庭訪問で担任の先生に「絵は素晴らしいけれど、勉強もするようにしてください」と言われたところ、お母さんはこのように言いました。「あの子は魚と絵が好きだからそれでいいんです。」「成績が優秀な子もそうでない子もいていい。みんな一緒ならロボットになっちゃいます。」

さかなクンのやりたいという気持ちを伸ばしながら、その能力をいかに発揮できるようサポートしていったお母さん。その結果、さかなクンは絶滅種とされていたクニマスを再発見するなど現在の活躍につながっていったのですね。

勉強ももちろん大事ですが、子どものやりたい気持ちに応えることも大切にしたいですね。

出典：朝日新聞デジタル 2016年7月2日 18時13分



郷中教育と寝屋子制度

郷中教育（ごじゅうきょういく）というのは、幕末期の薩摩藩（今の鹿児島県）において行われていた武家の青少年教育のことです。地区単位で、6歳ぐらいから15歳ぐらいまでの子どもたちが集まり、そこに15歳以上の年長者がついて、自主的に教育していました。教える内容も、武芸や学問からしつけを身に付けることまで多岐にわたっており、この郷中教育により、西郷隆盛や大久保利通など、明治維新をリードしていく多くの偉人が輩出されました。

また、三重県でも鳥羽市答志島において、一定年齢に達した男子が自分の家を離れ、世話をしてくれる人の家で同年代の子どもたちと一緒に寝泊まりをする「寝屋子（ねやこ）」と呼ばれる制度が今も残っています。

郷中教育や寝屋子制度は、地域の中で子どもを育てていくという制度であり、異年齢や同年代の子どもたちとのコミュニケーションを通じて絆を深めていく制度でもあります。

現在では、このような集団生活はなかなかないかもしれませんが、夏休みの子ども会などの合宿に参加してみること、貴重な経験になるのではないのでしょうか。



コラム

スマホになりたい

電話やメールだけでなく、SNSやインターネット、ゲームなど、1台で何でもできるスマホは便利なものです。ちょっと空いた時間には、ついついスマホを眺めてしまうという人も多いのではないのでしょうか。

しかし、度が過ぎるスマホの利用は、知らず知らずのうちに大切なコミュニケーションの場を失わせてしまっているかもしれません。

シンガポールのある小学生が書いた「スマホになりたい」という作文は、スマホに夢中になって自分に構ってくれない両親を見て、自分がスマホだったらいいのにと感じる子どもの率直な気持ちが描かれたものです。この作文は、多くの人々に共感と気づきを呼び、日本でも絵本として出版されました*。

(*) のぶみ著「ママのスマホになりたい」 (WAVE 出版・平成 27 年発行)

自分だけの時間を確保し、スマホを使いながらほっと一息つくことは、もちろん大事なことです。しかし、日々成長しながら変化している子どもの姿は、その時その時だけの貴重なものです。少しだけスマホのことは忘れて、子どもと向き合うかけがえのない時間もぜひ大切にしたいですね。

